

紛争処理申請書・別紙

令和4年

一般財団法人

自賠責保険・共済紛争処理機構 御中

453-0015

名古屋市中村区椿町 7-20 恒川ビル 5 階

にわ法律事務所

弁護士 丹 羽 洋 典

電話 052-459-5515 ファックス 052-459-5516

過日、[REDACTED] 保険株式会社より通知がなされた下記被害者の後遺障害の等級認定結果について次のとおり紛争処理をいたします。

保 險 者 ██████████ 保険株式会社

証明書番号

事故日時 令和2年

発生場所

加 害 者 氏 名

住所

被害者氏名

住所

申立の趣旨

被害者の本件事故による左頬部の複数の癍痕については、自賠法施行令別表第二第12級14号に該当し、左膝内側半月板損傷後の左膝痛については、同12級13号に該当し、先に認定を受けた左下肢の癍痕にかかる同14級5号と併せ、併合11級に該当する。
との判断を求める。

申立の理由

第1 等級認定結果について

- 1 [] 保険株式会社作成令和4年[]付「自動車損害賠償責任保険お支払不能のご通知」別紙によれば、左頬部の複数の癍痕については、互いに他の線状痕の近傍に位置する関係にあるものの、平行の状態でそれぞれが独立していることから、長さを合算して等級を認定することは困難であり、それぞれを独立した線状痕として捉えとし、その大きさがいずれも10円銅貨大以上の癍痕や長さ3センチメートル以上の線状痕とは捉え難いことから非該当と判断され、左膝内側半月板損傷後の左膝痛については、自賠法施行令別表第二第14級9号とし、左膝半月板損傷及び左膝挫減創に伴う左下肢の複数の癍痕については、同14級5号と認定を受け、併合14級と判断された。(以下「認定結果」という。)
- 2 (1) 左下肢の癍痕にかかる後遺障害等級については妥当であり、紛争処理を申し立てるものではないものの、以下に詳述するとおり、左頬上部の複数の線状痕については、相隣接し長さ3センチメートル以上の人目につく程度以上のものであり「外貌に醜状を残すもの」と認められ、自賠法施行令別表第二第12級14号に該当する。
また、同部位の突っ張り感及びしびれ等の感覚異常については、同12級14号に包括されるものとする。
- (2) 被害者の左膝については、明らかな外傷性変化が生じており、かつ、画像上症状の原因となりうる異常所見が得られており、医学的に証明可能なものであることから「局部に頑固な神経症状を残すもの」として自賠法施行令別表第二第12級13号に該当する。
以下その理由について詳述する。

第2 事故態様及び受傷機転について

- 1 被害者は、本件事故日、交通規制のある十字路交差点内の横断歩道において、自転車に乗車し、対面信号が青信号に変わったことを認め左右の安全確認の後に横断歩道上を直進したところ、対向車線の加害車両が、減速及び一時停止することなく時速約31キロメートルの速度で左折進行したため、加害車両正面部分と被害者左側面が強く衝突した。

加害車両は、衝突後も速度を緩めることなく、自転車もろとも被害者を10メートル程付近の縁石まで引きずり、縁石を乗り越え、さらに縁石奥にある壁にぶつかり停止した。

- 2 被害者は、縁石に自転車が押し付けられた衝撃で一度空中に投げ出されたのち、左膝下を縁石に強く打ち付けた。また、左顔面、両腕、両足、胴体の前面と左側面をアスファルトに強く打ち付けた。

第3 被害者の自覚症状及び症状経過（以下「本件後遺障害」という。後遺障害診断書、報告書）

被害者は、本件事故直後[]大学病院に救急搬送され、同日に左下肢腿縫合の緊急手術を施行し、同院及び[]病院並びに[]整形外科において左膝内側半月板損傷、左腓骨頭骨折、左脛骨骨折、左前十字靭帯断裂、左膝靭帯損傷、左下腿挫減創、左皮膚壊死等と診断された。

本件事故により、142日間の入院と43日間の通院加療を続けたものの、令和3年[]の症状固定後も以下の症状が残存した。

- 1 左頬瘢痕及び同部の突っ張り感、しびれ感、感覚異常
- 2 (1) 左膝の常時痛、可動域制限、荷重痛、運動痛
(2) 左膝から脛までの感覚麻痺、触れると電気が走るようなしびれ

第4 左頬部の線状痕について

- 1 下記左画像は、先の自賠責保険に対する異議申立の際に申立書に添付したものと同日令和3年3月1日に撮影された被害者の左頬部の線状痕の状態であり、右画像は同じ画像の線状痕部を拡大したものである（本書末尾に添付）。

画像上明らかであるが、被害者の左頬部左目尻下に1.5cm、左頬上部に正面からみて左から1.5cm、1cm、0.5cmの縦の線状痕が生じている（数値については令和3年11月9日付「交通事故受傷後の傷跡等に関する所見」参照）。



- 2 (1) この点、自賠法上の醜状障害に関する障害等級認定基準においては、2個以上の癍痕又は線状痕が相隣接し、又は相まって1個の痕跡又は線状痕と同程度以上の醜状を呈する場合は、それらの面積、長さ等を合算して等級を認定することとされている。
- (2) 上記被害者の4つの線状痕のうち、少なくとも左頬上部に位置する3条の線状痕は互いに相隣接しており、その間隔もわずか2乃至3ミリメートルである。
- また、右の拡大画像で明らかであるが、醜状痕部を中心とし色素を喪失していることから、線状痕部を含む全体として色素喪失を来しているともいえる。
- そして、確かに上記線状痕は互いに平行に印象されているが、これは凹凸のあるアスファルト路面上に顔面部を擦過した際に生じたものであるから、線状痕は互いに平行に印象されることは当然のことであり、数条の線状痕が印象される通常の受傷形態である。
- にもかかわらず、線状痕が印象された向きにより独立性の有無が判断されることになれば、擦過後の線状痕において、1個の線状痕として認定される場面はほとんど失われることとなる。
- (3) 以上のとおり、線状痕を取り囲む色素沈着部全体を併せ考えれば、数条の線状痕は1個の線状痕と同視できるし、これら線状痕はそれぞれ独立性を有するとも言い難く、これらを合算すれば3cm以上となっており、上記認定基準を満たしている。
- 3 現実的に考えても、上記のとおり被害者の左頬部の左目近辺という外観上極めて目立つ位置に、隣接した4つの赤色化した不自然な線状痕が生じていることは、1個の3センチ以上の線状痕が生じていること以上に人目につくものであり、被害者の労働能力の低下や精神的苦痛を生じせしめるものである。

以上より、被害者の左頬部の醜状痕は、自賠法施行令別表第二第12級14号に該当し、同部位の突っ張り感及びしびれ等の感覚異常についてはこれに包摂される。

第5 左膝の症状について

- 1 下記画像①は令和2年10月15日に、画像②は同月16日に、それぞれ■■■■大学病院で撮影された被害者の左膝CT及びMRI画像を抜粋したものであるが、CT上被害者の腓骨頭には明らかな骨折が生じており、MRI画像上、主に内側半月板後節に断裂が生じている。

そして、内側半月板損傷に対しては、令和3年1月19日、■■■■整形外科において関節鏡下での縫合術が実施された。

- 2 他方、画像③の同MRI画像上前十字靱帯脛骨付着部に輝度変化が生じており、画像④の同MRI画像上外側側副靱帯についても連続性を失っており、断裂が生じていることが捉えられている(■■■■医院経過診断書)。

画像①

画像②

画像③

画像④



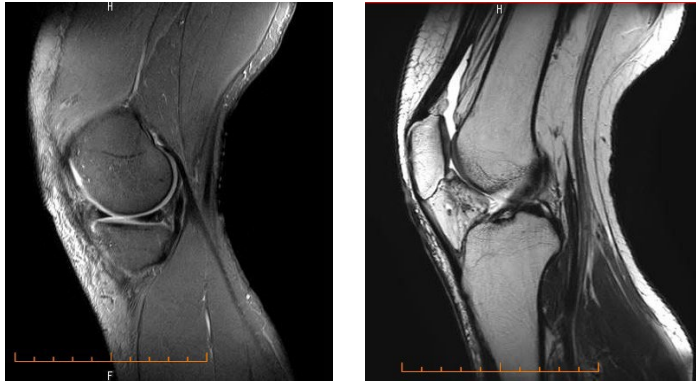
- 3 下記画像は、症状固定日である令和■■■■日■■■■大学病院において撮影された被害者の左膝MRI画像である。

画像⑤のとおり、被害者の内側半月板損傷部にはなおも輝度変化が生じており、縫合されたとはいえ損傷は残存していることが明らかとなっている。

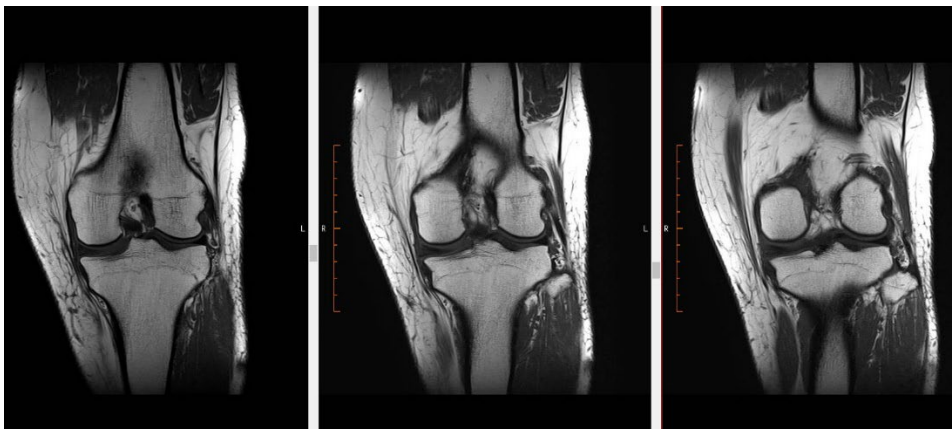
また、画像⑥のとおり、前十字靱帯の脛骨付着部付近の損傷部は改善しておらず、画像⑦のとおり外側側副靱帯も連続性は回復したとは言い難い。

画像⑤

画像⑥



画像⑦



- 4 (1) この点、認定結果は内側半月板損傷については縫合術により修復されたとして、被害者の左膝の症状について症状残存を裏付ける客観的な医学的所見に乏しいとする。

しかし、縫合術が実施されたとはいえ、上記のとおり被害者の内側半月板損傷部には尚も輝度変化が生じており、完全に回復したとは言い難い。

また、被害者の前十字及び外側側副靱帯損傷については何ら手術が実施されておらず、症状固定時においても依然画像上損傷所見は得られている。

- (2) そして、これら画像上捉えられている損傷所見は、被害者の自覚する左膝の荷重及び運動時に増強する常時痛等の原因となり得るものである。

以上より、被害者の左膝の症状については、症状固定時に撮影されたMRI画像上その原因所見が得られており、医学上証明されている。

第5 後遺障害による日常生活上の支障（後遺障害診断書、報告書）

1 学校生活に対する支障

被害者は、本件事故当時、[REDACTED]高校に通う3年生であり、就職

活動に向けて勉学に励む傍ら、部活動においても■■■■部員として大会に出るなどの実力を有していた。

しかし、本件後遺障害によって下記のとおり、具体的・現実的な支障が生じたことから、学校生活に対する支障を割合で評価するならば、後遺障害等級11級に相当する20パーセントは下らない。

ア 就職活動中という今後の人生を左右する一番大切な時期であったにもかかわらず、長期間の入通院により授業出席日数が足りず留年し、就職の面接も満足に受けられなくなり、人生が大きく狂ってしまった。

就職にも失敗し、従前のように体が動かない不自由さから、肉体的・精神的苦痛が生じた。

イ 留年によって、同級生の友人らと共に卒業することが出来ず、一人残され、大変辛い思いをした。

ウ 既に友人関係が構築された一つ下の学年と新しい環境下で授業へ参加することを余儀なくされ、左頬部及び左膝の瘢痕により、人目が気になるだけでなく、左膝の痛みにより動作の動きが遅くなるから、他の学生と比べて目立ってしまうことが増え、新たに友人関係を築くことも難しく、精神的に追い詰められてしまった。

エ 通学が困難になり、退学を余儀なくされた。

オ 左膝にうまく体重をかけられず、走ることも困難であることから体育の授業を受けることが出来なくなった。

カ 左膝の痛みにより、常時立ち姿勢を維持することが困難となり、荷重時に痛みが増強すること等から、就職先の選択として大好きなものづくりの現場への就職という選択ができなくなった。

キ 左膝の痛みにより歩行スピードが遅くなったため、朝早くに家を出なければならなくなった。

ク 左膝にうまく体重をかけることが出来ず、荷重時の痛みの増加や可動域制限等から、校内での教室移動の際に階段をゆっくり昇降し、ゆっくりと歩行することから、授業にはしばしば遅れてしまうこともあり、とても辛い思いをしている。

ケ 部活動■■■■部において、左膝に体重をうまくかけることが出来ず、また、痛みにより集中力も欠如することから、弓を引くことが困難となった。

コ 左膝が曲がらず正座が出来ないことから■■■■の所作が困難となり、試合

に出られなくなった。

サ 左膝の痛みにより、集中力が欠け、授業に集中することが困難となった。

2 日常生活に対する支障

被害者においては、本件後遺障害により、上記学校生活に対する支障だけではなく、下記のとおり日常生活に対する支障も生じている。

ア 左膝の痛み及び可動域制限から、畳の上の布団からの起き上がりや横になる動作が困難となり、従前よりも時間がかかるようになった。

イ 左膝の可動域制限によって、ズボンを穿くのに時間がかかり、転倒することが増えた。

ウ 正座が不可能になった。

エ 左膝の痛み・可動域制限により幼いころから家族で楽しんだスキーが出来なくなった。

オ 出来ないことが次々に増えていき、精神的に追い詰められて外出が困難になった。

カ 左頬部の瘢痕を隠すため、身支度に時間がかかるようになり、プライベートの時間が減少した。

キ 左膝のふんばりがきかず、脚立に登ることが困難になったことから、残り時間の少ない祖母への恩返しだった祖母宅の庭の木の伐採が出来なくなった。

ク 左膝が曲がらず、体重をうまくかけることができないので、浴室で髪や体を洗う際は、従前よりも膨大な時間がかかるようになった。

ケ 食事の際、食卓につくのに座ったり立ったりする動作が非常に困難となった。

コ 左膝の大きな瘢痕が気になってしまい、家族との大切な時間であった銭湯に行くことが出来なくなった。

サ 本件事故に伴う環境の変化や肉体的な苦痛から学校に行けなくなり、集中力が続かず、何もやる気が起きず、引きこもるようになった。

シ 幼い時から嗜んでいた■■■■が困難となり、市内の■■■■での指導のお手伝いに参加することが出来なくなった。

第6 結論

- 1 以上のとおり、左頬部の複数の瘢痕については、相隣接もしくは相まって長さ3センチメートル以上の人目につく程度以上のものと認められ「外貌に醜状

を残すもの」として自賠法施行令別表第二第12級14号に該当する。

- 2 また、被害者の左膝にかかる症状は、画像所見によりこれを裏付けることが可能であり、医学的に証明可能な症状である。

そして、本件事故後2年を経過した現在においても症状が残存しており、本件後遺障害は将来において回復が困難であり、「局部に頑固な神経症状を残すもの」として自賠法施行令別表第二第12級13号に該当する。

- 3 したがって、左頬部の瘢痕につき自賠法施行令別表第二第12級14号、左膝部につき同12級13号にそれぞれ該当し、先に認定を受けた左下肢の複数の傷痕にかかる同14級5号と併合し、併合11級となる。

以上